

## 『京都の大殉教を想う新しい福音宣教』

### ―日常からミサを生きる歩みを踏みしめて―

京都司教 パウロ大塚喜直

#### 1. 「日常からミサを生きる」京都教区の歩み

新年明けましておめでとうございます。今年も京都教区の全ての信者で、『みながひとつになって』（司教のモットー）共同宣教司牧を推進していきましょう。私たち京都教区は2004年から3年にわたり『日常からミサを生きる』をテーマにして、信仰と生活を統合した福音宣教する共同体づくりの歩みを続けてきました。昨年は、「新しい福音宣教」をキーワードとして、「新しい熱心・心構え」、「新しい方法」、「新しい表現」について分かち合いました。

この度、日本の教会が心から待ち望んでいた「ペトロ岐部（きべ）神父と187殉教者」の列福が決まり、この秋日本で初めての列福式が長崎で行なわれます。その中には「京都の大殉教」の52名が含まれています（注1）。私はこの一年を、列福される殉教者の信仰を模範にして、『日常からミサを生きる』京都教区の「新しい福音宣教」の歩みをしっかりと踏みしめる一年にしたいと思います。

#### 2. 小教区評議会の規約を今年中に調整します

「新しい福音宣教」を行なう教会の運営と活動を共同宣教司牧の精神で整える「小教区評議会の規約作り」は、昨年を最終の3年目として完成することを目標に取り組みました。56全ての教会から暫定規約案が一年かけて提出され、「小教区評議会規約調整委員会」が逐次それらの検討作業を行いました。実際に56個の規約は、教区の指針を元にしながらか、それぞれに工夫がこらされ、共同宣教司牧の精神を個々の小教区でどのように生かすか、また新たな部会制度を導入して動き始めた教会の動きをどのように表現するか、努力してくださっている姿がよくうかがえました。しかし、詳細においては多くの規約に教区の指針とやや異なる箇所や明確にしなければならぬ表現などがあり、調整の時間がもう少し必要となりました。そこで、この一年をかけて、個々の規約と、各教会・ブロックと教区全体との整合性のための検討と修正の作業を行いましょう。各教会は暫定規約のまま、教会役員の選出や、部会活動を軌道にのせる試みを続けてください。

#### 3. 日本のキリシタン時代の殉教

聖フランシスコ・ザビエルの宣教によって生まれた日本の教会は、すぐに有名無名の多くの信仰の先人たちの生み出しました。やがておとずれた激しいキリシタン弾圧時代を生き抜いた日本の教会は全国で多くの殉教者を輩出しました。そのうち、1862年に列聖された『日本26聖人殉教者』と、1987年に列聖された『聖トマス西と15殉教者』（含む「ミヤコのラザロ」）がいて、合わせて42人の聖人がいます。今年、この「ミヤコのラザロ」の列聖20周年の記念の年でもあります。そのほか1867年に『日本205福者殉教者』が列福されています（注2）。

日本司教団は、1981年ヨハネ・パウロ二世が来日された時に日本の殉教者について再三語られたのを機会に、1603年以降迫害と拷問が最も激しく続いた時代の殉教の調査を始めました。そして1984年正式にローマ聖座の許可をうけた「ペトロ岐部と187殉教者」の列福運動を始めました（注3）。ベネディクト16世は「ペトロ岐部と187殉教者」の列福を裁可し、決定の教令（Decretum）を發布されます。遂にめでたく今年の秋に日本で同殉教者の列福式を執り行うこととなります。これは日本の教会にとって大きなお恵みであり、福音宣教のために大切な機会としなければなりません。その中に「京都の大殉教」52名が含まれているのです。私たち京都教区は特別の思いでこの一年を過ごさなければなりません。

## 4. ペトロ岐部と187殉教者の特徴

この度の殉教者にはいくつかの特徴があります。第一は、殉教の地が東北、関東、関西、中国、九州の各地に及んでいること。第二は、信徒、修道者、司祭、町民、農民、武士などいろいろな人々であること。第三は、幼児から老人にいたるまでの男女の殉教者、健常者、身体障害者が含まれていることです（殉教者列福調査委員会編、『愛の証 ペトロ岐部と187殉教者』、1995年、白柳誠一枢機卿の序文より）。日本司教団の列福調査委員会担当の溝部脩司教様は、現在ローマ・カトリック教会が聖人の位に挙げる基準について次のように指摘されます。「まずは信徒の時代を反映して、信徒の代表的人物を優先させること。しかも、その信徒というのは、彼らが生きた当時の社会で家庭を営み、子どもを育て、信仰生活を生きた人々のことである」。この度の福者のほとんどがキリシタン時代に信仰をもって生きた老若男女、子どもから高齢者に至るまでの家庭人なのです。私たちは世界でも比類のない殉教者をいただく日本の教会を誇りに思います。

## 5. 京都の大殉教

キリシタン時代の大殉教と呼ばれるものは、京都の大殉教（1619年10月6日）、長崎の大殉教（1622年9月10日）、江戸の大殉教（1623年12月4日）と3つあり、すべて火刑でした。京都の大殉教は、将軍秀忠の命によって六条と七条の間の鴨川の東側（現在の太正正面のあたり）で、すべて信徒52名の一団が殉教を遂げました。うち幼児を含む12名が幼い子どもであり、若い母親の奉献が大きな特徴です。1987年田中司教様がこの京都の「神のしもべたち」の列福運動を始められて以来、京都教区の信徒の方々の篤い祈りが今、聞き届けられようとしています。

「新しい福音宣教」に挑む現代の私たちが彼らの生涯と殉教の証しに思いを馳せ心に刻めば、真実の信仰をもって現代を生きようとする信徒とその家庭人に大きな励みとなります。とかく聖人と言えば司祭や修道者の聖職者が目立つだけに、京都の大殉教は信徒の信仰をおおいに鼓舞します。

## 6. ジョアン橋本太兵衛、妻テクラと5人の子ども

ジョアン橋本太兵衛とその妻テクラは、信徒としての経歴、神に捧げた子どもたちの花束をもってしても第一に紹介されます。太兵衛は京都の一番古い信者の父を持ち、幼い頃から信仰に親しんでいました。テクラも京都の出身で、小さい時からの信者で、主人と信仰においてもよく協力していました。殉教のとき、子どもと共にいのちを捧げるその姿は、殉教する日本の教会のしるしのようなものでした（結城了悟著、『京都の大殉教 1619年10月6日』1987年刊より）。

私たちには、信仰を受けただけではなく、信仰を『日常からミサを生きる』姿で証しする使命があります。生活に追われる現代人に、神の愛こそ命の支えであり、『日常』を生きる勇気と力を得る光であると証しする使命を与えられているのは、私たちキリスト者です。もちろんその私たちも生活に追われる現代人です。ですから、私たちの宣教的な生活には、当然大きな勇気と犠牲が伴います（2004年司教年頭書簡『日常からミサを生きる』より）。そのために、「殉教者の心は、キリストに忠実であろうと求道する者の初心だと思います」（前掲書、田中健一司教の「前書き」より）。

## 7. 現代の殉教

殉教とは「証しする」という意味です。殉教者が証しするのは、自分の信仰の「強さ」ではありません。それは、「神の愛」のすばらしさです。命をかけて、神の愛を明らかにするのです。現代では、どの宗教を信じて日本では迫害されることはありません。しかし、それだけに信仰をもっていても、それを「生き生きと」生きることが難しくなっています。「ペトロ岐部と187殉教者」の信仰の鼓動が、時代を越えて私たちの心に響いてきます。そして、私たち現代の生温い信仰者を大きく揺さぶります。キリシタン時代の殉教は遠い昔物語ではありません。

私たちは自分が洗礼をうけたあと、どうしているでしょうか。普段あまりにも自分のことだけを考え、どれほど周りの人々の救いのことを考えているでしょうか。それどころか、自分の信仰と救いさえも失いかけていないでしょうか。まして自分の信仰を証しする気持ちがあるでしょうか。洗礼を受けているということ、それは神の愛を知ったということであり、それは同時にキリスト者として、それを知らない人々に証明する使命があたえられているということです。それぞれの人生で神の愛を具体的に証しする方法は千差万別ですが、共通点はキリストの命令どおり、神の愛を信じ、互いに愛し合うことの実践です。

## 8. ペトロ岐部神父と司祭召命

大分県国東半島の記念公園にあるペトロ岐部神父の銅像は前を見据え胸を張り、見るものを彼と同じ視線へと誘います。ローマまで行って司祭に叙階され帰国したら迫害の時代。最後は拷問をうけ殉教するという波乱万丈の生涯を生きた岐部神父の目には、彼を雄々しく宣教に向かわせた屈強たる精神がみなぎっています。信徒の時代と言っても、カトリック教会にはミサ聖祭と諸秘跡を執行し、教会に全く生涯を賭けて奉仕する司祭がどうしても必要です。今回の188名の殉教者の中に4人の司祭がいます(注4)。これらの司祭たちはいずれも波乱に富んだ生涯を送り、壮絶な殉教を遂げています。彼ら司祭の殉教は、日々宣教司牧に邁進苦労しながらも忍耐し、希望して生きようとする現代の司祭たちに、大きな励みと慰めになります。日本は久しく司祭召命が少ない状況ですが、この度の4人の殉教司祭の列福は、日本の教会の司祭召命のために私たちが果たすべき務めを思い起させてくれます。共同宣教司牧を推進する京都教区の私たち信徒や司祭も、自らの人生を教会にささげ尽くす司祭を自分たちの中から選び出し送ってくださるように、父なる神さまに真心と相当の犠牲によって祈らなければなりません。

## 9. 殉教者が果たす預言者の役割

現代日本の教会は第二バチカン公会議の精神でキリストの福音を日本の社会に浸透させようと努力しています。キリシタン時代の多くの宣教師が日本人と日本文化を評価し、日本という土壌に福音が土着化するために、ありとあらゆる試みを行いました。しかし、どの時代どの国にも非福音的な要素がある限り、真理である神のことばを告げる使命が止むことはありません。昨年のカトリック正義と平和協議会の京都大会での「このままでいいの?」という呼びかけも、今日の世界や日本を覆う諸問題の根底に平和への脅威があることを痛感し、「このまま、何もしなくてもいいのだろうか?」と、キリスト者の預言者として責任を喚起しています。閉会の、子どもとともに捧げるミサでは、大人たちが現代社会において信仰を真実生きるために、キリスト者がなすべき預言者としての使命を果たす決意を子どもたちの前で言い、子どもたちが受け継ぐ未来のために今大人がなすべきことを実行する約束を神の前で行いました。

『日常からミサを生きる』という目標の達成は、人間の尊さが踏みにじられるところでは必ず立ち向かって戦っていくというキリスト者の根本決断が生活全体にどのくらい染み透っているかにかかっているのです(2004年の司教年頭書簡)。「ペトロ岐部と187殉教者」の死は、「新しい福音宣教」に向かう私たちがキリストご自身の根本決断と戦いにあずかる勇気を与えてくれます。

## 10. 高山右近の列福運動を進めましょう

信徒の時代を反映するには、教会の中で特別な働きをした人たちを挙げる必要もあります。特にキリシタン時代、世間の事情に疎い外国からの聖職者たちを補佐し、社会的に大きな影響を与えた人たちのことです。その代表的人物が『ジュスト高山右近』です。京都教区は、高山右近が幼少期に過ごした奈良・大和榛原で毎年「右近こども祭り」(5月5日子どもの日)を地元の方と共催で行い、顕彰活動が続けています。高山右近ゆかりの名古屋・大阪教区と共に、右近の列福運動に力を入れましょう。

## 11. 平和の元后マリアに祈る

今年も京都教区の福音宣教の歩みを聖母マリアの取次ぎによって、父である神様におさげします。そ

して平和の元后マリアを通して、「世界の平和」のための祈り続けましょう。「新しい福音宣教」の「新しい表現」としてキリスト者が平和について考え、祈り、行動することは義務です。これは、宗教や文化を越えて平和を愛するすべての人にも共通の義務です。神が与える真の恒久的な平和のために、真理を学び、真理を告げ知らせ、証しする福音宣教者になるように祈りましょう。

2007年1月1日 神の母聖マリアの祝日

注1.

「京都の大殉教」の名称について

現在、京都・鴨川大仏正面の殉教地には「元和キリシタン殉教の地」の石碑が立っている。確かに1619年10月6日京都で行われた大殉教は元和年間に起こった出来事であるが、「元和大殉教」ということばは、日本キリスト教史のうえで従来1622年9月10日長崎西坂での大殉教を指すことばとして定着していることから、それとの混同を避ける意味で、「京都の大殉教」ということばを用いた。

日本の三大殉教と呼ばれる他のひとつ「江戸の大殉教」が、「東京の大殉教」でなく、当時の地名「江戸」の大殉教となっていることから、「都の大殉教」あるいは「京の大殉教」とすべきであるとも考えられるが、「京都」とすることについても根本的矛盾はなく、かつこれまでカトリック教会内の列福運動のなかでも、すでに定着したことばとして「京都の大殉教」のことばを今回正式に採用した。

注2.

「福者」とは、聖人の前段階。日本にゆかりのある人々で、現在、列福運動が進められているのは、キリシタン時代ではジュスト高山右近、現代ではサレジオ修道会のチマッティ神父、長崎教区の中村長八神父（ブラジルで逝去）、イエズス会のペドロ・アルベ神父（ローマで逝去）など。

注3.

「殉教者列福調査特別委員会」の「歴史調査委員会」が招集されて、殉教者の資料収集、福者の選定が行われた。法制委員会が結成され、さらに日本での調査の最後の段階で「証人喚問」が行われ、殉教者について知名度がどのくらいか、崇敬されているか、福者になるのに障害(しょうがい)がないかなどのが、聞き取り調査という形で行われた。京都では、5人の信徒が証言した。集められた証言と莫大(ばくだい)な殉教の資料は荘厳に封印されて、ローマ教皇庁の「列聖省」へ送られ、審議が始まった。

注4.

ジュリアン中浦神父 [長崎]、ディエゴ結城(ゆうき)了雪(りょうせつ)神父 [大坂]、トマス金鏑(きんつば)次兵衛(じひょうえ) [長崎]、ペトロ岐部(きべ)かすい神父 [江戸]。[ ]は殉教地。